

別の宿を求めて

競争の無い暮らし・文明 の作り方

加井 永照

| | |
|-------------------------------|----|
| はじめに..... | 4 |
| 私たちは何をしてきたのか..... | 5 |
| 1 文明はなぜ行き詰ったのか、どうしたらよいのか..... | 6 |
| 2 「規則正しく・速く・沢山」が退化を招いた..... | 7 |
| ①規則正しく..... | 7 |
| ②速く..... | 8 |
| ③沢山..... | 8 |
| 3 競争が退化に拍車をかけた..... | 9 |
| ①棲み分けが基本..... | 10 |
| ②分業の専門化が競争を生んだ..... | 10 |
| ③専門は意識を退化させる..... | 11 |
| 競争の無い生き方・暮らし方..... | 12 |
| 1 競争のない社会..... | 13 |
| 2 小さな枠社会の考え方..... | 15 |
| ①参加者に求められる考え方..... | 15 |
| ②調和（平均）の原理が働く集団形態..... | 17 |
| ③枠社会の組織..... | 18 |

| | |
|---------------------------|----|
| 3 小さな粋社会の組み立方..... | 20 |
| ① 粋社会の核をつくる..... | 20 |
| ② 法人名義で土地を所有する..... | 21 |
| ③ 生活経済と財布..... | 23 |
| 新しい文明 の作り方..... | 25 |
| 1 粋社会とグローバル社会が重層する文明..... | 26 |
| 2 小さな粋社会が無数に存在する文明..... | 29 |
| 3 小社会の連合社会という文明..... | 31 |
| 4 集団を社会の単位とする文明..... | 33 |
| 5 私の未来予測..... | 35 |
| おわりに..... | 37 |

はじめに

世界は混乱状態に陥っていると思われていますが、これはある人たちの信じる世界が混乱しているだけであって、全員の世界が混乱しているわけではありません。非常に良い状態になりつつあると感じている人もいるでしょうし、何事も起こってはいないと思っている人もいるでしょう。

世界は無限にあります。また自由に作れるものでもあります。一休さんが、「どうせ一世の宿ならば、いい宿に泊まりゃんせ」と詠っています。今よりも少し良い宿を紹介したいと思います。短い文章で書いておきましたから、ゆっくり読んでいただきたいと思います。別の宿が見えると思います。そして、今までの宿は何だったのかと思うでしょう。

第1章

私たちは何をしてきたのか

無限にある世界の一つ

1 文明はなぜ行き詰ったのか、どうしたらよいのか

私たちの文明が行き詰ったのは、地球の性質や活動を上手に活用できなかったからです。地球に寄生する立場でありながら、地球の法則を無視し人間独自の法則を使うようになったからです。そのために、地球の性質や活動がマイナスに働くようになったのです。

例えば、大きな地震があると多くの死者が出ますが、揺れによるショック死はまれで、大半は建物の倒壊による圧死や窒息死です。

しかし、古代の人たちは分散して暮らし、軽い材で建物を作っていたから、地震による現代のような被害はありません。古代人の方が、地球の法則にうまく適合していたといえます。

私たちが、彼らの考え方の延長で進んできたなら、今頃は地震災害とは無縁の生活をしていたはずです。地震が起これば、そのエネルギーをうまく蓄積して生活エネルギーとして使っていたでしょう。それが進化というものです。

しかし、現実の私たちは全く逆の位置にいます。これは、意識（考え方）が退化して行ったということです。地震の現像を知ったとき、柔構造の建物を作れば倒れないと考えるのが進化と思いがちですが、実は退化です。大揺れする建物を作って中にいる人はどうなるのでしょうか。それは建築学のテーマではないと言うのでしょうか。意識の進化した人は「危うきに近寄らず」の選択をします。低い建物にして分散して暮らします。そ

んな事をしていたら進歩がないと考えるでしょうが、それは、物質界に基点を置いたときの見方で、それが意識が退化したときの考え方です。意識の進化した人は、暮らし（物質界）の手数を減らす方向で快適に暮らす道を選びます。そして、意識を内側に向けて精神を探索します。意識の世界を遊びます。

私たちの意識が退化していったのは、いつまでも暮らし（物質界）の安定が作り出せなかったからだと言われています。不安定なために、暮らしを保つことにエネルギーのすべてが消費され、内側（心）に意識を向ける時間が作れなかったからだ。

つまり、物質界の安定化の方法が解らず、安定化できなかったので暮らしにエネルギーが消費されてしまう、という退化の悪循環に入ってしまったのです。

この悪循環から抜け出すために、何が退化の一步となったのかを考えてみましょう。

2 「規則正しく・速く・沢山」が退化を招いた

① 規則正しく

頭（左脳）は、機械的な規則正しさしか理解できないですから、ありとあらゆるものをそういう秩序で覆いつくそうとします。教育にも、社会制度にも、経済活動にも・・・機械的な規則性を求めます。

しかし、地球環境（気象や地殻の活動）は、機械のような規則正しさで活動しているわけではありません。そういう環境の中を規則正しさで埋め尽くすというのは矛盾しています。仕組の破綻を待っているようなものです。暮らしに安定が作り出せない大きな理由の一つです。

② 速く

頭（左脳）は、寿命のあることを理解していますから、命のある内に来るだけ多くのことを体験し、存在を表現したいと思っています。そのために、あらゆることに速さを求めます。

例えば、新しいパソコンが2機種、同価格で発売されたとします。一つは、性能が以前のままですが100年の耐久性を実現したもの。もう一つは、耐久性は以前のままですが処理速度が10倍になったもの。どちらか1台をモニタープレゼントするといわれたらどちらを選ぶでしょうか。大半の方は後者を選択するでしょう。

私たちの暮らし、文明もそれと同じ選択の積み重ねですから、元々安定性はありません。

③ 沢山

頭（左脳）は未来を考えます。そして、未来の自分を安定状態に置こうとします。それを実現する方法の一つは、食料にしろ衣類にしろ沢山持つておくことです。この欲求には限りがなく、あらゆるものは多いほど良い

となり、人類の共通理念は「より豊か」だと言われるまでになりました。

この理念によって地球の資源は使いつくされ、地球はバランスを崩し、自然環境をますます不安定なものにしました。

頭の求める「規則正しく、速く、沢山」は、社会原理、経済原理になっており、家庭も学校も、会社も国家もその3点セットで動き、しかもその仕組は、年ごとに緻密になって行き、他者との関係では1秒の誤差も許されないものになりました。コンピュータに1秒の誤差があると、金融決済では不渡りとなり、交通システムでは事故になります。

人間の精神が耐えられないほど緊張を強いる社会となったわけですが、これは人間の手では止めることができません。

しかし、宇宙の原理はうまく出きているもので、人間の法則は進めば進むほど脆弱になるようになっており、地球の生理現象（地震、火山の噴火、台風、気温変化、海面の移動・・・）によって、人間が壊れる前に文明の方が先に壊れることになるでしょう。

3 競争が退化に拍車をかけた

暮らし（物質界）の安定がはかれなかったために、意識を物質界に常住させざるを得なくなり、意識の進化を止めてしまったのですが、競争はさらに意識を下降させることに作用しました。

① 棲み分けが基本

生物は、基本的に同種間では競争をしないものです。競争はエネルギーの消耗であって、それを続けると最後は自滅しかないと本能的に知っているからです。動物園の一つの檻に、相性の悪い仲間をいっしょに入れておくと、お互いストレスで餌が食べられなくなり死んでしまいます。競争とはそういう結末になります。

自然の中にいる動物は、調和できない関係になったときは「棲み分け」を行って世界を別にします。このようにして競争が起きないようにしています。

② 分業の専門化が競争を生んだ

私たちが、生物の一員でありながら競争を続けているのは、そうしなければならぬ暮らしを作ったからです。それは、分業に始まります。分業は、生産性を向上させる方法で、私たちの求める「沢山」に答えるためのものです。その分業仕事を、個人も会社も専門家として行うようになった時から競争が始まりました。

認識できない多数が入り交じる社会では、需給の一致点が判りません。そのために、需給の過不足は日常的に起こります。供給過剰になれば上から順番に消費され、残りは切り捨てになります。

しかし、専門者は供給過剰になっても、仕事替えは簡単には出来ないですから、その世界での上位に行く方向の努力をします。上位にいれば、過

剰の時も切り捨てにならないからです。この努力が競争であって、止まることはありません。

分業は時間と共に細分化され、ますます転業が難しくなりますから、競争は激化する一方となります。

③ 専門は意識を退化させる

専門によって（間口を狭くすることで）、物事を深く知るようになると言われていますが、これは明らかに間違いです。単に、緻密に、微細に知ることにはすぎません。間口を広くしなければ深くには入れません。深い洞察力は、広い思考から生まれるものです。

(意識の進化とは、思考の幅が広がり、意識が拡大していくことです。これは抽象的なことではなく、意識振動数が上昇することであって、物理的な違いとなります。)

仕事を専門化すると、思考の範囲が狭くなり頭脳の一部しか使わなくなります。そのために、最近では若年性痴呆症という障害も起きています。思考の縮小は、同時に意識の縮小であって、それが固定化すると意識の退化（意識振動数の下降）となります。

意識が退化したらどうなるのかということですが、説明が大変長くなるので、この冊子では触れないことにします。ともあれ、好ましくない事態が多くなるでしょう。

さて、これからどうしたらよいのかということですが、まず、専門、競争の世界から出ることです。次にその方法を説明します。

第2章

競争の無い生き方・暮らし方

宇宙は競争しない

1 競争のない社会

意識の進化を考えると競争のない社会を作るべきなのですが、人類は元々そういう社会で暮らしていました。採集によって各自が自給自立していた時代は、共同はあっても競争はありません。今でも、太平洋上の小さな島国ではそういう暮らし方をしています。

また、分業を行っていても、競争のない世界があります。それは、枠（垣根）のある社会の中で分業を独占する仕組みを作っている社会です。19世紀半までの日本はそういう社会でした。

今の考え方からすれば、分業を独占で行うのは良くない事のように感じられますが、夫婦の世界はそれが基本になっています。夫婦はお互い分業を行っていますが、ここに自由競争という考えはありません。お互い独占を守り無競争世界を作っています。このために、家庭は安らぎの場になっています。

これは、夫が外で働き、妻が家庭を守るという固定した働きを意味するのではなく、分業によって補い合う働きを意味します。

夫婦の分業方法を是とするなら、社会もまたそうであるべきです。宇宙は相似象的な構成で作られており、夫婦の拡大世界が社会である以上、両者の原理に矛盾があってはなりません。

夫婦の分業が独占になるのは、他人が介入できないように制度的な枠（垣根）を作っているからです。そのことに異議がないなら、社会にも適宜枠を設けるべきです。

電話や車のない時代は、万人に等しく距離の制約が働きましたから、社会の枠（垣根）は自動的に作られていました。地域内の業者と地域外の同業者が互格で競合することは物理的にありえないことでした。そして、距離の枠が働かない時は、夫婦のような制度的な枠（同業者組合など）を作って、同業者が過剰にならないような工夫をしていました。これが昔からの日本の社会でした。

そのような安定した社会が壊れたのは、近代になって欧米から自由競争という思想が入ってきたことと、通信・交通の発達で距離の制約が破壊されたことによってです。

競争による切磋琢磨が良いことなのか、枠を作った無競争が良いことなのかは、宇宙の仕組みから考えてみるべきです。

太陽系の中に、他の恒星系の惑星が入ってきて自由競争をするのが良いことなのか。地球に、火星や木星の生命体が入ってきて自由競争をするのは良いことなのか。日本に、大陸の動植物が入ってきて自由競争をするのは良いことなのか・・・。

しかし、どんな例を上げたところで、今の時代は自由競争が好きな人が多いですから、全社会的に枠を設けて行くということは望めないでしょう。

そこで、平和な社会がよいと思う人から順に、独立完結した世界を作り、そこに柁（垣根）を設けて競争のない社会を作ったらよいと思うのです。熱帯雨林地域の少数部族は、100～200人ぐらいの人口で独自の言葉を持っていますから、それぐらいの人数がいれば人間は完結した世界が作れるのでしょうか。

また、アメリカ合衆国の『アーミッシュ』（プロテスタントの一宗派）のように、文明の中にあっても独自の柁社会を作っている人たちもいますから、方法はいくらでもあるといえます。

2 小さな柁社会の考え方

① 参加者に求められる考え方

今の競争社会から離脱し自給自立することは、思っているほど難しいことではありません。技術より考え方の問題です。自然に在るものと、自分で作れるもの（古代人よりはるかに多くのものが作れます）だけで、暮らしを組み立てればよいわけです。車は必要かどうかではなく、自分たちで作れる道具なのかという判断をします。単純です。作れないものを使おうとすると、今の競争社会から出られなくなります。

人類が有史以来グループを作って暮らしてきたのは、一人で出来ないことは、皆の力を合わせること（合力）で処理するためです。

ところが、今日の専門者の組み合わせによる分業体制では、その合力が使えません。設計の応援に営業が加わっても人数倍になることはありません。かえって足手まといです。又、専門家による分業体制は、どこかに欠落が出ると全体が動かなくなります。企業はそういう時、外部市場から人員を入れたり、仕事を外注したりして対応しています。

しかし、新しく作られる「小さな柁社会」には、増員市場も外注先もありません。したがって小さな柁社会の分業は、専門家（スペシャリスト）ではなく総業者（ゼネラリスト）で組むことになります。

総業者というのは、一人であっても自給自立で生きようと思う人のことです。思いのあるところに技術や知識は集まるもので、やがてゼネラリストになります。

そういう人が集まって、それぞれ得意な部分を出し合っ分業体制を組めば、一人で自給自立するより、また自給自足者の集団（かつての農業集落のような集団）よりはるかに高度な生活（社会）が実現します。

このようなメンバーによって組まれた分業体制は、どこかに欠落が出ても誰れでも穴埋めができますし、どこかの部門が忙しくなれば全員で応援することもできます。合力が使えるのです。許容力があり安全度の高い社会が実現できます。これが「小さな柁社会」を作るときの基本的な考え方です。

② 調和（平均）の原理が働く集団形態

社会の枠が明確で、かつ競争のない世界では、従来の世界とは全く逆の行動原理（「調和の原理」）が働くようになります。それは、持てる者がそうでない者に対し、「与える」という行動エネルギーが流れるようになります。道徳も倫理も関係ありません。自動的にそのようになります。

これは、家庭の中を流れるエネルギーと同じものです。家庭の中で、一人だけ時間や財産をたくさん持とうとする人はいないはずで、何かあるたびに、持てる人がそうでない人に与え、全員の持分が平均化して行きます。

そのようなエネルギーが、より流れやすくなる枠づくりの基本条件を挙げますと以下ようになります（細かく言うとまだいくつもあります）。

- ① **グループの枠が明確であること（部外者にも判ること）。**
- ② **メンバーになるハードルが高いこと。**
- ③ **基本的な財産（土地や建物）が共有物であること。**
- ④ **グループを出る人に財産の持ち出し権がないこと。**
- ⑤ **150人以下の規模であること。**

このような条件になるのは、人間の業のようなものと深い関係があります。人は他者に何かを与えたとき、与えたものをずっと確認したいのです（グループが大きくなると顔の見えない関係だと確認ができない）。又、与えたものが薄まったり、消滅したりするのがいやなのです（人数が増えると財産は薄まり、持ち出しがあると消える）。そういう部分を守ろうとすると先のような条件になります。150人という人数は、相手を一人の人間として理解でき、交際できる頭脳機能の限界人数です。

以上のような条件（規定）で小さな枠社会を作っておきますと、どんな事があっても枠の中でホームレスや飢餓者が出ることはありません。その結果、暮らしに大きな安心が生まれ、意識を進化させることが可能になってきます。

③ 枠社会の組織

枠の世界といっても、『個人』の次が一気に100人、150人の世界になるわけではありません。そんな仕組みにすると小さな需要を見落とします。子供のちょっとした変化を見つけて、それに適切に答えることが出来るのは親です。このような事からも、個人の次は『家族』という単位になります。

そして、家族の次には『家族グループ』という単位があった方がよいでしょう。家族では多少手に余るといった程度のことを、枠社会全体で議論

するのは大げさ（非効率）です。隣の家族と協力すればよいことです。

古代の頃から家族グループという単位はあったようで、記録が残っている時代からも「五保」、「屋敷」、「五人組」などの単位があります。政治的なものもありますが、「屋敷」は自然発生的な集まりのようです。そういう単位の集合で農業集落（100～200人）が形成されていました。

しかし、新しく「小さな粋社会」を作る場合は、家族グループ（10～20人）当りから土地の広さの影響を受けます。広い土地が確保できるなら、そういう家族グループを集合させて、50人、100人、150人といった社会を作ることができます。

広い土地が確保できなければ（日本のような小地主制の国ではこうなりやすい）、一定エリアに家族グループを集めて「家族グループ群社会」を作ります。この場合、本家グループ、分家グループとした方がまとまりやすいと思います。それでも分散している場合は、各グループの独立性が高くなり、それぞれが一つの粋社会のようになります。

新しく作る粋社会のリーダーは、人物というより共通の理念、理想がリーダーです。それに思いを巡らしながら自分のすべきことを発見して行きます。企業のようなピラミッド型の組織は作りません。

粋社会での個人は、大きく二つの仕事があります。一つは、当面現金

収入が必要でしょうから外社会との関係があります。もう一つは、粋社会の自給自立のための仕事があります。こちらの部分では、ゆるやかな分担組織を組みます。得意分野を担当することになるでしょうが、それしかないという分業組織ではありません。

とにかく、自給自立が成立するまでは、二足のワラジをはく生活ですから現金生活をしていた時の何倍もの仕事量があります。このことは覚悟しておくべきでしょう。

3 小さな粋社会の組み立方

① 粋社会の核をつくる

粋社会を作ろうと思った人が呼びかけをして、まず2～3人の仲間を作ります。ここまでは少人数が良いです。最初の仕事は、全体計画を作り、グループの社会的な粋となる法人を設立するところまでです。これはどこに居ても出来ることです。

今の社会制度の中で、対外的な粋（垣根）として最適なものは法人です。法人の種類はたくさんありますが、「株式会社」が一般的で扱いやすいと思います。法人は、グループが社会的な存在であることを示すためと、メンバーの出資権利を確かなものにするのが目的で、必ずしも経済活動に使うわけではありません（経済活動のためには別会社を作った方が安全です）。

ここまでの作業で、「小さな粋社会」の大半が出来上がっています。

② 法人名義で土地を所有する

現実化の第一歩は、生活拠点となる土地（宅地、山林、原野などの地目の土地）を買うことからです。その土地は、法人の名義で取得します。これによって土地は株主（＝メンバー）の共有財産になります。

また、法人所有なら相続が発生しないですから、生活拠点の永遠性が保障されます。これは大変重要なことです。今の法律では、メンバーの人が相続人になれないですから、相続が発生する状態になっていると生活拠点を失うことにもなります。会社の所在地は、生活拠点となる土地に移動させますが、これは人が移動するときに合わせて行えばよいでしょう。

農地は、一般的な法人では買うことが出来ませんが（農業生産法人なら買えますが設立が難しい）、これはメンバーの誰かが個人名で買います。このとき、出資した法人から借金して買う形にすれば抵当権が設定できるので、相続が発生しても大きな問題にはならないでしょう。

現実レベルの処理になってきますと、すべてにおいて現行の法律が関係してきますから、小冊子ですべてを説明することは不可能です。関係図書で基本的な知識を得て、要所々は専門家の手を借りるという考え方をして下さい。

最大のテーマは拠点場所をどこにするかということですが、結論を言っておきますと、直観に従って成り行きに乗って決めればよいと思います。

ます。

現金生活のウエイトが高い間は、仕事の多い都市の近くが便利ですが、そういう場所は土地が高価です。また、自給が進んでくると、今度は自然環境の豊かな所がよくなります。

さらに、グループで行う事業によっては、今の場所では許可されないということもあります。将来の事業など事前に解ることではないですから、不都合が起きたらその時は移動すると考えるのです。そのような考え方をすれば場所の決定に悩むことが少なくなります。

そういう技術論の一つですが、場所の的が絞れない場合は、小さい面積の土地をあちらこちらに買って、買ってから本拠地になる場所を決めるという方法もあります。地域環境（地域の間人、習慣など）は、土地の所有者にならないと解らないという部分があります。必要でない土地は、後で売却すれば済む話です。

とにかく、事が起きてから時間のない中で、①、②の作業をするのは無理ですから、余裕のあるときに別の考え方を（未来の一手を打っておくとか、現物保険に加入しておくとか、少し冒険をしてみるとか・・・）、手がかりを付けておくことでしょう。

土地の次は建物となりますが、これがメンバーの手で作れない内は自給は成立していません。衣や食は、物々交換でも手に入りますが、住の物々交換は無理です。増改築や新設のたびに外社会の手が必要なら、完結社会にはなりません（住の話は専用サイトを参照下さい）。

③ 生活経済と財布

これは、財布をどうするかの話です。枠の世界の中で完全な自給自足が成立すれば、外の社会からモノを買うことがなくなりますから、生活経済をどうするかとか、財布をどこで持つかなど無縁のことになります。

しかし、自給自足が成立しない間は、外の社会との経済取引が続きますから財布の問題が発生します。これは仕事と関係しますから、それぞれの枠社会で最適な方法を考えるしかありません。

例えば、全員が外に働きに出るケースですと、収入は個人口座に入りますし、それぞれ異なる費用が発生しますから、大半は個人の裁量で処理し、一部を出し合って全体の財布を作ることになります。

この逆で、内部で事業を行い、それに全員が従事する場合は、入金はずべて事業所口座に入りますから、自然にそれが全体の財布になります。個人費用はそこから配分される形になります。

しかし、これは基本論で、現実には外に働きに出る人、工芸家のような個人営業の人、何人かで事業を行う人、年金収入の人・・・などに分かれると思います。複雑です。

こういう状態で財布をどこに置くのかは難題で、この問題で行き詰っていくことが多いのですが、これを解決するのが「調和（平均）の原理」です。四国の山村の例ですが、昔は村で家を焼失した人が出た場合、全員負担で立て直したそうです。エネルギーが平均化に流れる世界では、

財布はどこに在っても同じということになります。家族の間でもそうです。

財布の問題は、「調和（平均）原理」が働く組織を作ることがすべてであって、それが確かであれば生活がしやすいように持ったらよいといえます。

一般論でいえば、枠社会が豊かであれば財布は分散化し、そうでなければ一つに集約されるというのが法則です。

紙幅の関係で、競争の無い世界の作り方のポイントだけに触れましたが（詳しくは専用サイト<http://www.kumonoito.jp/kami>をご覧ください）、次に、それが全体社会とどのようにかわるかを説明しておきます。

第3章

新しい文明 の作り方

4つの文明の可能性

前章で、小さな完結社会（粋社会）の考え方と作り方を紹介しましたが、それが社会全体にどのようにかわり、どのように広がり、どのように新しい地球文明になって行くのかをシュミレーションしておきます。

1 粋社会とグローバル社会が重層する文明

永遠に続く文明はありません。それには大きく二つの理由があります。一つは、外部条件が変化してそれまでの文明をサポートできなくなるケース。今までの文明は、地球の資源を一方的に消費する文明でしたから、外部条件は刻々と変化しており、すでに樹木と淡水は今までの文明をささえる量を失っています。

もう一つは、文明を作っている人間の意識変化です。意識は静止することがなく、退化か進化への変化を起こします。どちらに変化してもそれまでの文明は維持できなくなります。

そのような変化によって、文明の収縮や混乱が起きると個人の生活もその影響をダイレクトに受けますから(ホームレスはすでにその被害者)、それへの対応技術が必要になります。

環境の全体粋が縮小した場合、単細胞生物は合体して個体数を減らすという方法を取ります。企業は、工場を統合したり合併したりして、やはり数を減らすという方法を取ります。

人間の場合は、世帯数を減らす（複数の世帯を一世帯に統合する）のが倫理的で効果的な方法ですが、現時点ではそこまでの社会技術を持っていません。

しかし、事態が進行すれば背に腹は変えられないという人が出て来ます

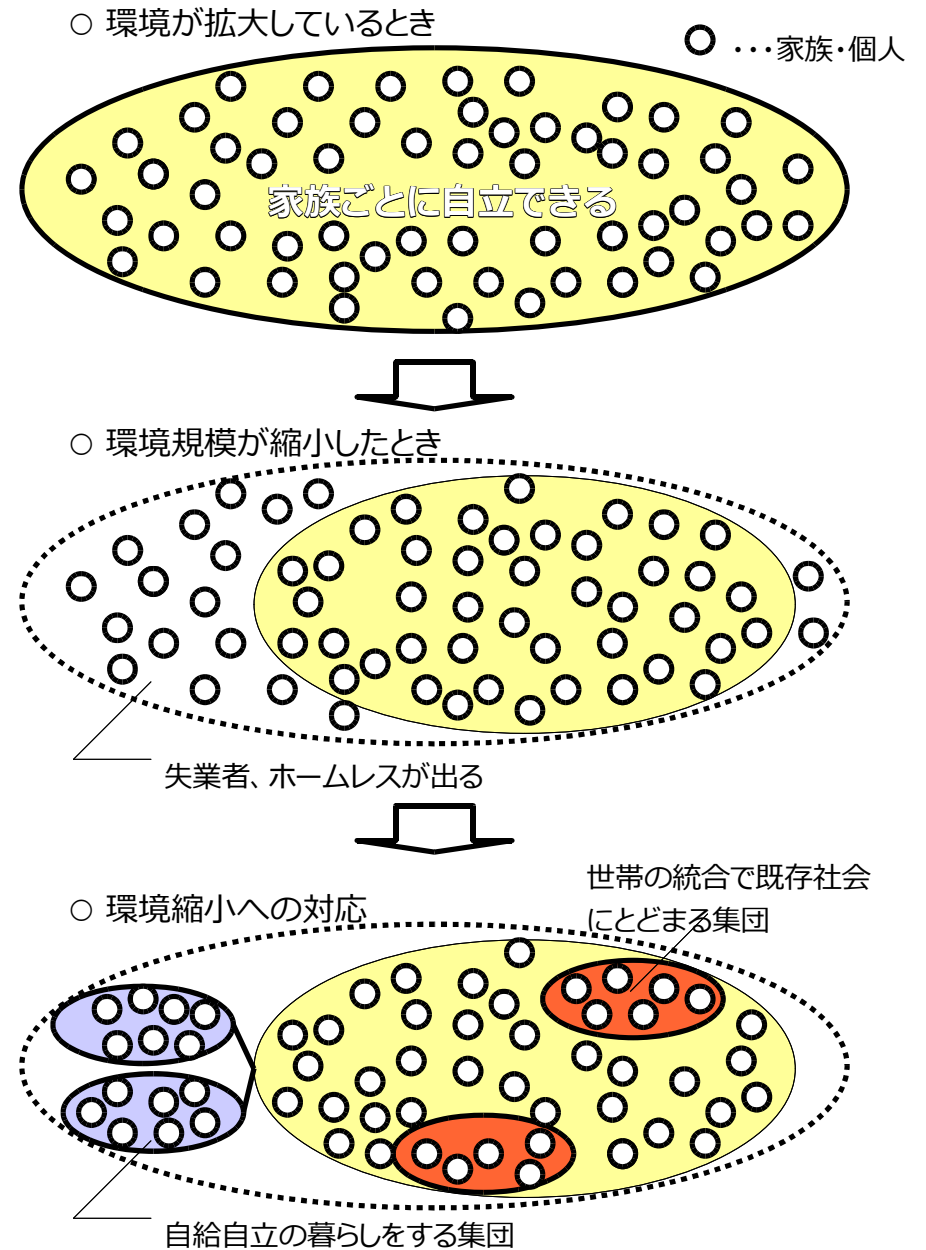
から、いずれ統合化を実行するでしょう。ただし、第2章で紹介したような家族統合の方法を発見するには少し時間がかかると思います。

何事であれ10%の人が行うようになれば、もう他の人たちが無接触ではいられなくなるので社会全体のこととなります。社会の方が納まりの良い社会システムを組みます。

例えば、喫煙者が10%いれば社会が灰皿を用意します。タバコと無縁な家庭でも、来客者のために灰皿を準備します。携帯電話を10%の人が利用するようになると社会がルールを作ってくれます。

家族をグループ化、統合化する人が10%に達すると、社会がそれ用の制度を作りますから、その後は急激に広まることになり普通の生活スタイルになります。このとき、既存社会の中に留まるグループと、社会の外に出て自給型の生活をするグループの二つに分かれると思います。そして、ある時期の文明スタイルとなります。

自由競争のグローバル社会が縮小節制すれば寿命が伸びるでしょうから、しばらくは小さな枠社会（調和の原理が働く世界）と重層する文明が続くでしょう。うまくコントロールできれば、数百年続く文明となるでしょう。しかし、部分の原理と全体の原理が異なるというのは矛盾ですから、これは次の文明に移行するための橋渡しの文明だろうと思います。



2 小さな枠社会が無数に存在する文明

先の暮らし方の進化形ですが、既存社会から出た人達が小さな枠社会で自給自立できるようになると、外の社会は有っても無くても、又、同じような枠社会がどこにあらうと全く関係なくなります。

20世紀始めアマゾン川流域には1000ぐらいの部族社会があり、それぞれ言葉が違うことから、単独で独立社会を作っていたと考えられています（今は森林伐採により半分以下になっています）。

それと同じように、小さな枠社会がそれぞれ自給自立し、それが地球上に無数に存在する文明スタイルも考えられます。

小さな枠社会で止まる理由ですが、今の人間の脳は、脳科学的に見ても文化人類学的な調査から言っても、150人ぐらいの人間関係を処理するのが限度だろうと考えられています。150人の人間関係を、数学的に単純計算すると11,175通りになるとかで、これだけでも手に余るような関係です。したがって、それ以上の人数集団を作ってもあまり意味がないとも言えます。集団が大きくなると「調和の原理」が働かなくなり、管理体制が必要になります。

ただし、150人の世界では、いくら分業を駆使しても今の文明のような道具世界は作れませんが、道具が無くなれば意識面では最も進化しやすい状態になります。

『量子力学』の現実解釈は、「意識が物質（現実）の在り方を決定している」です。このことから言えば、意識を見張ること、意識をコントロールすることが大切なこととなります。『ヨガ』では、「無焦点」という現実の処し方が説かれています。「無焦点」（オープンフォーカス）とは現実（物質界）の動きに焦点を合わせず、意識の方に焦点を合わせていくことで、それが究極の方法といえます。

現実に意識を取られないためには、現実（暮らし）をシンプルにしておくというのが一つの条件となり、道具が作れないという一見不便な状況が逆に大きなメリットになります。

『老子』は、質素でシンプルな小さな社会が理想だと説いています。そこに生まれるのは超意識社会です。老子が、「理想の小社会においては、隣の社会が鶏や犬の鳴き声が聞こえるほど近くにあって、人々は生涯行き来することはないだろう」と言っていることから、小社会は一つのグループ意識で暮らしていることが解ります。

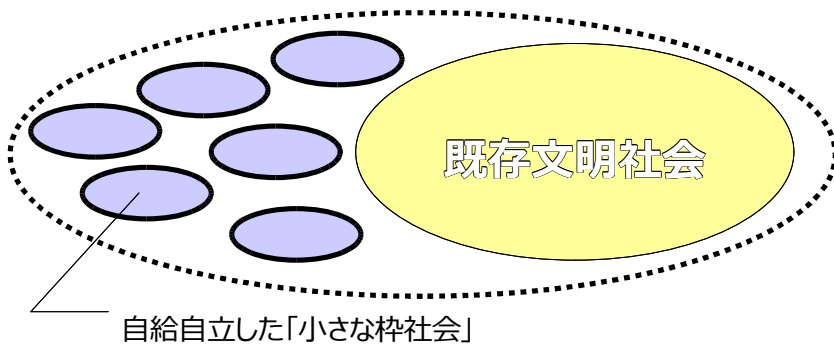
グループ意識（集合意識）というのは、鳥や魚が群れで移動するときを使う意識で、この意識を使っているとき群れを出るものはありません。

人間でも長年いっしょに暮らしてる仲の良い夫婦は、一つの夫婦意識で生きようになります。

これは意識の拡大であって、物理的に言えば意識振動数を上昇させた状態です。この世的には、メンバー間では言葉を交わさなくても相手の求めが解り、需給の過不足が生まれない効率のよい暮らしになります。

中国の奥地には、老子の説くような超意識社会が今もあるようです。最近私が出会った、ある人の体験話は大変リアルで、村の生活風景の説明が私の知る超意識世界と全く矛盾しない描写になっており、フィクションだとは思いませんでした。

つまり、超意識で暮らす小社会が無数に存在する超意識文明に発展する可能性も考えられます。この場合、人類すべてが超意識になる事は考えにくく、従来文明の中に生きる人と超意識社会に入る人との二つに分かれ、両者の交流はない文明になるでしょう。ネアンデルタール人とクロマニヨン人も、交流のないまま1万年も併存していますから、地球にはあってよいことなのでしょう。



3 小社会の連合社会という文明

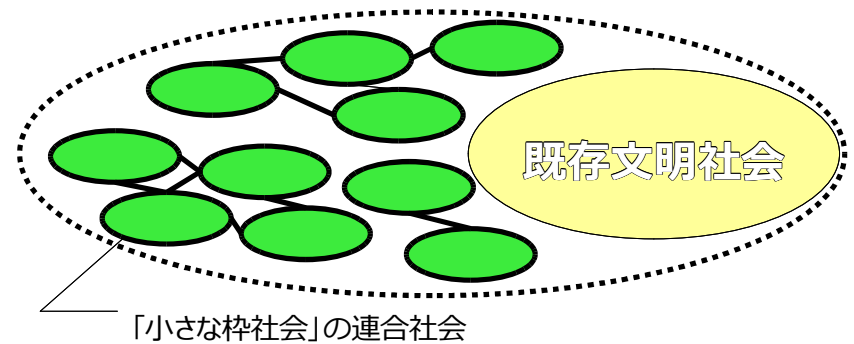
小さな卒社会が単独で存在するのではなく、それらがゆるやかに連携して行く文明スタイルも考えられます。一つの例ですが、アメリカ合衆国に暮らす『アーミッシュ』(宗教改革のときに生まれたプロテスタントの一宗派で、18世紀に多くが新大陸に移住し、独自の文化の中で暮

らしている)は、150~200人のコミュニティ社会を作り、人口が増えると分家コミュニティを作るという方式で拡大して行き、現在千を超えるコミュニティになっています。

コミュニティ間のつながりはゆるやかで、毎年の連合イベントのとき物々交換や情報交換が行われる程度で、全体(20万人)の統括機関は持っていません。宗教的な教えのみで統一が保たれています。

注目すべきは、合衆国にいながら合衆国の文明を利用せず(電気も直接引かずバッテリー電気を使っており、車、電話、インターネットなども使わない)、150~200人で維持できる独自の文化と制度の中で暮らしてきたことです。

『アーミッシュ』のコミュニティ社会の拡がり例は、小さな卒社会が増えていったとき、ゆるやかな連合という形で文明が生まれる可能性を示しています。この場合も、既存文明を生きる人と「小さな卒社会」を生きる人との二重構造になります。



4 集団を社会の単位とする文明

これは、今の様な国家があるという前提ですが、「新しい文明は、個人ではなく自給自立できる集団（小さな枠社会）を社会の最小単位とする文明になる」と、ある人たちは言っています。

今は個人が社会の最小単位ですが、これが自給自立できる集団に変わると言うのです。イメージしにくいかもしれませんが、今日の産業界と同じようになると考えれば解りやすいかもしれません。仕事をしているのは個人ですが、すべては会社（団体）の名において成されます。それと同じように、日常生活もすべてが「小さな枠社会」の名において成されるようになるということです。

そういう社会になれば、私たちは「調和（平均）の原理」が働く枠の中で暮らし、社会全体としては分業体制を取り今のような道具文明を保つことができます。

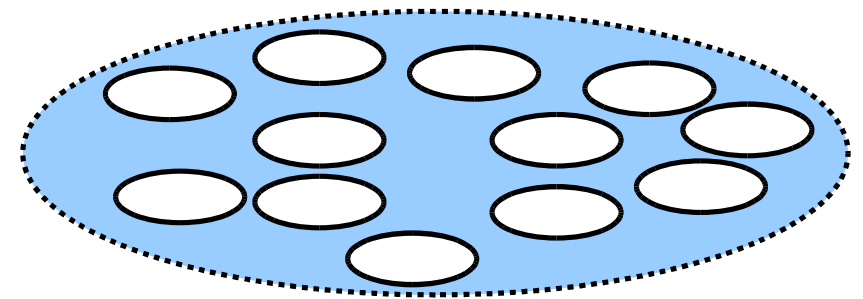
ただし、社会単位を個人から集団に移行させることは、技術的には可能であっても社会的に実行するのは難しいと思います。

実行するとすれば、まず『憲法』の条文の中の「個人」という部分（権利と義務が謳ってある）を、すべて「集団」に置き換える必要があります。普通にはそんな変更は出来ないでしょう。

そんな事が出来る時というのは、国家が機能しなくなるような事件があった時です。そんな事があると行政は有って無きがごとですから、

人々は生きるために集団、徒党を組みます。つまり、世帯の統合化、グループ化が行われます。これに乗り遅れた人は生きて行けないですから、社会は短期間の内に集団の集合体となります。

それで現実が動いて行けば、つまり取引が集団対集団で行われるとか、個人は何をするにも所属する集団が問われるとか・・・になって行くと、その後の法律は集団を社会の単位にしたものになります（集団を作るとき、2章で説明したような組織の方法を知らないと、運営で10～20年苦しむことになります。共産主義崩壊後の東欧諸国はそうになりました）。



国民の大半がどこかの生活集団に所属している

国家が機能しなくなるような事件の根拠はありませんが、人間の理解できる根拠など意味がなく、起きるときには起きるものです。歴史を見ても文明の転換はそういう想定外の出来事によって始まっています。

地球の状況を見ますと何が起きてても不思議ではないですから、この最も非論理的なことで新しい文明が始まる可能性が最も高いといえるかもしれません。

この方向にシフトした場合、国家はあってもその権限は少なく、せいぜい防衛と外交を受け持つ程度でしょう。

5 私の未来予測

今の文明は、刻々と脆弱になっていると言いました。それは地球の生理現象（地震、火山の噴火、海面の移動・・・）を無視して、規則性、緻密性の精度を上げつづけるからです。今や、地球の自転のわずかな揺らぎも無視できなくなっており、何年かごとに「うるう秒」を加えて世界中のコンピュータの時刻合わせをしています。この許容性の無さで、文明が崩壊するような事が起きると思います。

この時、国家体制も揺らぎ、私たちは自力で生活を守らなければならない状況になると思います。この混乱の中で生まれるのが生活集団（家族グループ）です。

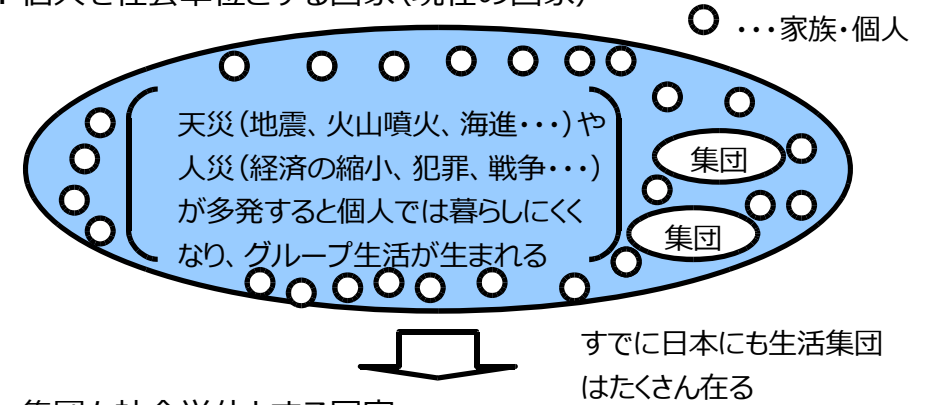
国家の再構築は、生活集団を前提になされると思います。それは前項のようなプロセスで現実がすでに集団を前提に動いていることと、国家に個人をサポートできるほどの力がないためです。福祉も教育も集団内部の問題になるかもしれません。この部分で集団化に乗れなかった人は淘汰されることとなります。

最初の頃は、集団を社会単位とする国家が構築されるでしょうが、やがてこの枠組を抜け出していく集団が現れるでしょう。

ある集団は『アーミッシュ』のように連合化し、国家から距離を取り出すでしょう。又、ある集団は、少人数で完結世界を作り、『老子』の説くような理想世界を生きるでしょう。

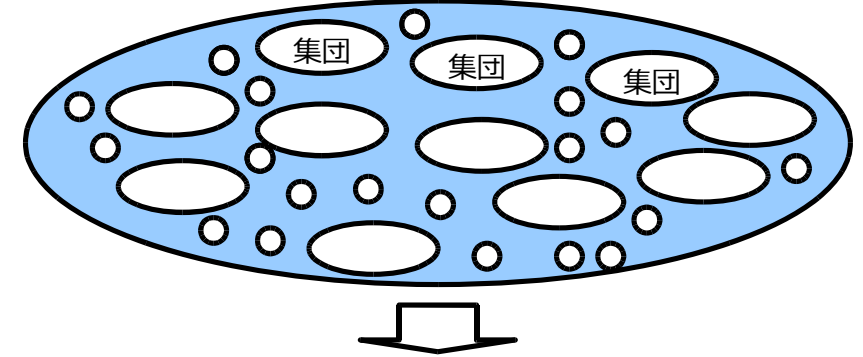
新しい地球は、意識振動数に応じた世界が重層する社会になりそうです。

1. 個人を社会単位とする国家（現在の国家）



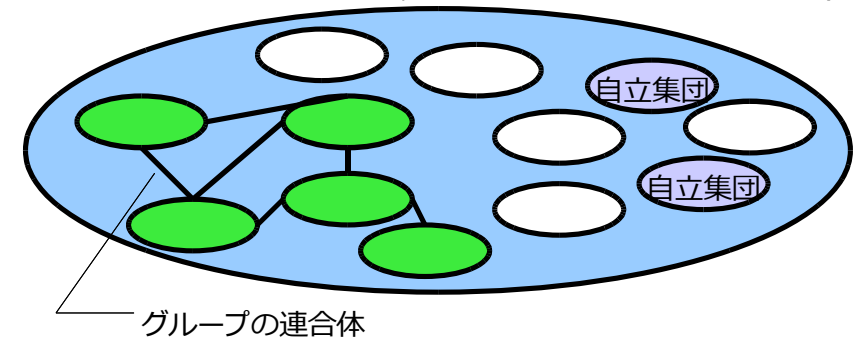
2. 集団を社会単位とする国家

(国家が弱体化すると、個人にきめ細かいサービスが出来なくなる)



3. 集団国家の進化

自立力のあるグループが国家を離れる(今日の自治区のような存在)



おわりに

これからの可能性として、小さな卒社会が単位になる四つの文明スタイルを紹介しましたが、この文明論を左脳に詳しく説明したくても使える記号（哲学、思想、技術論）がありません。今ある記号は、人間が農業を始めてから生まれたもので、基点が「個人」に置かれた理論です。

『老子』の説くような、一つのグループ意識で暮らす「集団」を基点に置いたらどうなるのか……。経済を人為ではなく自然の生産力に置いたらどうなるのか……。グループ意識が生まれる住まい方が設計できる人も、自然の生産力をベースにした経済が語れる人もいません。すべては白紙状態です。興味のある方は記号づくりにチャレンジして下さい。

まず人間論が必要になります。小さな卒社会を生涯出ないとしたなら、人は何を指して生きるのでしょうか。その部分が押さえられての政治、経済、法律……。であり、教育となります。

文明がシフトするときは、このような無から有への作業が山のように出てきます。既存の学者の仕事ではありません。この文章に触れた方の仕事です。期待しています。

(コメント：専用サイトの<http://www.kumonoito.jp/kami/com.html>)

説明補足サイト <http://www.kumonoito.jp/kami>

発行日 初版：2009年9月30日

発行人 中野 隼雄

FAX 086-522-5342